

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第15号

《研究ノート》

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和

南さつま市松木藪遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏃について

川口 雅之

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文

岩川官軍基地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の基地の配置—

湯場崎 辰巳

令和3年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2023. 3

『縄文の森から』第15号 目次

鹿児島県における尖頭状石器の出現と展開

黒川 忠広・・・・・・・・ 3

大隅半島における縄文時代後期後葉の土器の様相
—中岳Ⅱ式土器を中心に—

宮崎 大和・・・・・・・・ 19

南さつま市松木藪遺跡で出土した弥生時代後期の鉄鏝について

川口 雅之・・・・・・・・ 29

境川（万之瀬川支流）流域の弥生時代から近世に至る開発について

倉元 良文・・・・・・・・ 33

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について
—岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 43

令和3年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

岩川官軍墓地の昭和8（1933）年の手紙について —岩川小学校訓導の手紙の要約と造営当時の墓地の配置—

湯場崎 辰巳

Aspects of pottery from Latter half of the late Jomon Period on the Osumi About the letter of 1933 of the Iwagawa government graveyard.

Tatsumi Yubasaki

要旨

令和2年度に西南戦争の官軍兵士が埋葬された岩川官軍墓地（曾於市大隅町）の調査を行った際、昭和8（1933）年の手紙の提供を受けた。

本稿では、要約を行い、当時の岩川官軍墓地の状況を把握することを目的とした。また、この手紙には造営当時の墓石配置が記載されており、現在の配置とは、異なることを報告した（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021）。熊本県の官軍墓地との比較を通じて、岩川官軍墓地では造営当時は部隊別に墓石を配置したが、その後の整備の際に、熊本県の配置を参考に、配置し直した可能性があることが判明した。

キーワード 岩川官軍墓地 訓導 将校 勇士 薩軍 官軍

1 はじめに

筆者は令和2（2021）年に西南戦争時の官軍兵士が埋葬された岩川官軍墓地（曾於市大隅町岩川）の確認調査を担当した。その際、馬場墓地（岩川官軍墓地隣接）の管理の方に、昭和8（1933）年の岩川小学校訓導丸山義武氏の手紙（コピー）の提供を受けた。この手紙には、丸山氏が官軍墓地に眠る官軍将兵の親や配偶者などに、その存在を知らせることの大切さを説いていることが垣間見える。また、造営当時と考えられる墓石の配置が記録されている。現在の配置と異なることから、熊本県の官軍墓地の配置と比較することで、現在の配置に至った経緯を推察したい。

2 岩川官軍墓地について

岩川官軍墓地は、曾於市大隅町岩川に所在し、「大隅弥五郎伝説の里」の北側、岩川・馬場集落墓地内に位置している。現在79基の墓石があるが、昭和8（1933）年の略配置図（資料9）によると、86基余りの墓石が記録されている。なお、墓石の石材は熊本県天草の下浦石（砂岩製）で、熊本県をはじめ、多くの官軍墓地で使用された石材である。

昭和42（1967）年7月には、斜面が崩れ、土砂が流れ込む等したようである。地元商工会議所が中心となり、墓石周辺が掘り出され、墓地の周囲にブロック塀を巡らし、入口もコンクリートで固め、献灯が2つ設けられ、現在に至っている。

当地に埋葬された官軍兵士は、主に西南戦争の大隅地域（百引・大崎・岩川）で戦死した者や、都城の病院で病死した者と刻字されており、特に激戦であった百引での戦死者が多い。一番高位の人物は、陸軍大尉の山形照

方、次に少尉の奥田政実、少尉補の林為隆、以下軍曹、伍長、兵卒、馱卒、軍夫と続いている。戦死者の出身地は、仙台、東京、名古屋、大阪、広島各鎮台から派遣されており、全国各地に及んでいる。また、以前は犬の墓もあったと伝承されている（大隅町誌編纂委員会1990）。

『大隅町誌』によると、埋葬までの流れは、まず大崎假宿、野方荒佐野、百引の激戦地から遺体を運び、いったん現在の墓地北側の空き地周辺に大きな穴を掘り、そこに仮埋葬した。その後、官軍墓地の造営に併せて、現在の場所に移したようである。埋葬形態については、火葬と土葬の両方の記録が残っている。

3 手紙の内容（資料1～4）

資料1～4は、岩川尋常小学校の訓導丸山義武氏が、静岡県小笠群小笠町大石（註1）の大橋敦氏に岩川官軍墓地への思いを綴った内容である。岩川尋常小学校の訓導丸山義武氏は、当時の岩川教育委員会や校長の山口卓志氏の後援を受け、遺族への連絡や官軍墓地の整備に奔走していたことが窺える。手紙の宛先は、大橋良蔵氏（資料7岩川官軍墓地埋葬者名簿57番）の御子息または、子孫の大橋敦氏と推察される。

4 手紙の要約

ここでは、手紙（資料1～4）の要約を記載したい。著者訳のため、可能な範囲で要約した（註2）。なお、要約と資料を比較しやすいように、段落ごと（段落名①～⑤）に要約をまとめている。

資料1 要約

- ① 是時厳しい寒さ、社会は多難で、満州（内蒙古）は風雲急を告げ、国内は不況の年である。西郷隆盛が死去して50年あまり、日本の発展策の第一は、朝鮮と満州（内蒙古）への大地への発展を堂々と論じたけれど、その政策は受け入れられずしてその地位から下り、下野しも、その政策決行の裁量が反対派により、反乱の罪に問われ、明治10年、賊名を着せられ、「勝てば官軍、負ければ賊軍」と叫んで、城山に永久の遺恨を抱いて露と消えてしまった。だけでも、西郷隆盛の罪は今更、論ずるにおよばない。
- 時代を達観し、国家百年の大計を樹立する。これが西郷隆盛の精神である。少しの私利私欲もない。
- ② 明治天皇は、西郷隆盛の生前の忠誠を褒め、情をかけ庇護し、賊軍の汚名を取り払い、位を与え、天皇陛下の限りない恩恵をうける。以来、幾十年西郷隆盛の精神は鹿児島にのみならず、全国にも躍動し、成長を続け、更に将来への進展を続けている。満州の情勢がただならず、国家の多難なる秋に、西郷隆盛ならば、今日の嵐に道を示していたはずだ。今更だが、西郷隆盛の偉大さをしのばれる。西郷は、大和民族の発展地の第一は、鴨江（高野山？）と興安（満州？）の間であり、詩にして吟じている。
- ③ 以前は賊名を着せられて、白い目で見られた薩軍の人々、つまり西郷隆盛の部下は、今や西郷とともに行動したため、名誉と栄光を与えられる面がある。戦没者は武勇銘々として、浄光明寺（現在の南洲墓地）や、はたまた各地にあり、墓は苔むしたけれど、光り輝き花が絶えることはなく、生存者は尊敬の的となり、常に当時のことを談じて、意気揚々と元気である。
- ④ されど、これを討伐した官軍の諸兵卒はどうであろうか。当時薩摩では、兄は官軍、弟は薩軍、父は賊軍、子供は官軍の情景は各地で見られるところだが、これは職務上・大義上の問題だけである。

資料2 要約

- ① しかるに、当地にて何が正義の戦・軍であろう。本末転倒の有様である。官軍となる賊軍となるのは、これは皆その主や、その職に忠実なるゆえである。将卒の精神は、分かれることはない。錦の御旗を揚げ、命をかけ、反乱の賊軍の討伐を行い、薩軍健児（勇ましい兵士）と決戦した官軍、大和魂の発現であることに他ならず、私たちの模範であることは、言を俟たない。天皇の軍隊、錦の御旗を掲げる官軍も、正義正当なる皇軍、各地に転戦するおりに、不幸にも死して護国の霊となり、草むす屍となりし者はどれくらいか、混乱のおり、遺骨にして故郷に帰れた者はどれくらいか。見えない魂霊は海・山を越え、さまよい帰れど、異郷にある兵士の屍はどれくらいか。風雨50有余年、大部分は温かき父や母、子、孫らの香花もなく、さみしい時を過ごすのみである。
- ② ああ、国家に命を捧げし兵士の霊、厚き国家の慰霊

に黙祷をささげるとはいえ、子や孫への恩憂の情、切にし、死者の霊が呼びかけるものあるのだろう。何百の他人の供花より、血のつながった親族の供える花が兵士の御霊を慰めると信じている。野原の草木の葉に霜がおり、吹く風が身にしみる晩秋の夕方、これらの兵士の墓前にただ立てば、行く末や往時が忍ばれて、涙なくしてはいられません。

- ③ 私には祖父がおります。77歳になります。20歳の頃、薩軍に従軍し、肥後・日向・薩摩・大隅の各地に転戦し、生死の境に直面すること一度ならず、幸か不幸か、生き永らえ、未だに健在です。以前の話になれば、祖父は無然として、「当時の官軍と薩軍の両軍の戦没者は、どのようにしたのか。我々も埋葬したが遺骨も各地に数多く、その他も数が多いが、霊前には香や花を供えることができなかつた。」と、私にも、もらすことが常でありました。

資料3 要約

- ① それに加えて、私の職は教職に奉じ、県下の何処に赴任するかも分からない。常に授業にて大義を説き、人の道を教える身なれば、これらの勇士に思いをはせて然るべしと更に願い、教えている。これらの勇士の供養を丁重に行うことは祖父の希望でもある。
- ② 去る11月9日に（消して改行か）
- 天皇陛下が、鹿児島に幸された。恐れ多いことです。ありがたいことです。その際に、私は、はじめに鹿児島市に入り、浄光明寺に詣で、薩軍勇士の偉人西郷隆盛の眠れる墓前を廻り、感慨深きものがありました。さらに行幸の儀に列せし他の県人の感慨深げにたたずむのを拝見して、更に感銘をうけました。さらに当時の官軍の戦没者の事に及ぶとまた感慨するだろうと思います。
- ③ 本年の4月に当地に赴任し、程なくして、官軍墓地があると知り、以来、幾度か詣でて勇士の御霊に謝罪し、これらの墓碑の苔を払って勇士の名を探り、生地を検索したりしました。その数百人ほどであります。
- ④ 去年、当墓地に眠れる一将校？の未亡人、手を尽くして、亡き夫の墓所を探して、遠路から故人の霊前に詣で、愛慕の情、少しばかり滞りして帰られたと聞きました。（不明）
- されど幾十年間、一人家庭を守り、子供を育て、帰らぬ夫を待ち、今日、墓所を探り得て、願い叶えたと語り喜んでいと聞き、未亡人の感慨やいかばかりか。涙が頬を伝うのを覚えます。
- ⑤ 将校の家でもそうなのです、数多き兵卒や軍夫に関してはどうなのか。さらに遠い故郷の人はどうなっているのか。これらの遺族の中には
- ※資料4に続く

資料4 要約

- ① いまだに、自分の父や祖父、叔父がこの地に埋葬されていることを知らない人々もいるのではないかと考

えられます。もちろん、国はすぐにこれらを調査し、すでに遺族には通知していると信じ、遺族の方々も重々承知の事とは察しますが、多くの遺族の中には、前記（一将校？の未亡人）の一士官のような家も少なくないことも想像できます。このような方々のために、所在を伝えようと長い間一心に願っているところです。しかし、私は仕事が多忙を極めております。さらに給料も安く、貧しく、遺族への連絡に充てる余裕もなく、念願を果たすことなく月日が過ぎさってしまいました。そのような中、本校校長山口卓志氏がある時は密かに、ある時は表立って励ましていただき、さらに、町教育委員会が物的に援助を提供してくれることになりました。大いに心躍り、念願を果たすこととしました。ありがたきことに、行幸で天皇陛下のお顔を拝した記念として、また、時期が冬休みであり、3～4日をあて、準備を整えることができました。必要以上のことで、かえって迷惑だと叱責を受ける覚悟はできています。必要な人に必要なことができれば良いと思っています。一つ若輩の行うことですので、大目にみていただきたいと思っております。

- ② この地に眠る百の魂は皆官軍です。薩摩では敵ですが、大義を敢行し、進んで国難に殉職した兵士で、いささかも恨みや怒りの気持ちはありません。天皇陛下の赤子（せきし）である。同胞である。もし、私の祖父ならば、どこかで死し、所在不明なれば、いかに思うだろう。異郷に参拝する人もなく、さみしく眠る勇士を思うとき、他人事とは思えない。幸いに私の考える所をお酌み取りいただき、許されることを切望します。最後に百人の勇士に代わり、遺族の方から温かき血の通った通信を希望し、併せて来訪を待ちわびています。その仲介を取り持つことを、私は誓って労をいといません。

12月25日記 鹿児島県曾於郡岩川小学校訓導
丸山義武

後援 同校長 山口卓志
〃 岩川教育委員会

昭和8年頃

5 熊本県の調査状況

ここでは、熊本県における官軍墓地調査事例を紹介し、岩川官軍墓地と比較を検討したい。

熊本県八代市にある若宮官軍墓地跡は陸軍の墓地で、シルバーワークプラザ建設に伴う調査が行われている。昭和23年まで官軍墓地であったため、改装後の墓坑やボタンなどの遺物が出土している。114基の棺（木棺111基）が検出され、長方形や方形・円形の墓坑である。遺体のあった将校は、個々に墓坑が設けられたと思われる。墓石は残存していないが、埋葬図が残っている。それによると379基の墓石があったことが判明しており、階級別に配置されている。

熊本県八代市にある横手官軍墓地跡は警視局の墓地

で、球磨川駅地区土地区画整備事業に伴う調査が行われている。65基の棺が発見され、木棺55基、襖棺2基が確認されている。複数の棺を埋葬する溝状墓坑と、個別の墓坑に分類されている。溝状墓坑も個別に木棺が埋葬されており、個々に埋葬されたものと考えられる。墓石は残存していないが、埋葬図が残っている。それらによると270基の墓石が配置されており、階級別に配置されている。

熊本県玉名市にある高瀬官軍墓地は陸軍と警視局の墓地で、都市公園整備に伴う調査が行われている。昭和38年に改葬が行われ、合祀塔に大部分が埋葬されている。調査では、記録上の埋葬者に対して、墓坑の数が少なく、実際に埋葬されている将校は限定的と推定している。各地で葬られた者を含め、一括して高瀬官軍墓地に墓碑が整備された結果と考えられている。記録によると395名が埋葬され、その墓石の配置は陸軍・警視隊とも階級別に配置されている。

熊本県玉東町にある高月官軍墓地は官軍墓地の中では、被葬者数が最大で、陸軍の980名が葬られている。半高山公園整備計画が起因となり、国指定史跡を目指して調査が行われている（平成25年西南戦争遺跡として指定）。墓石が残っており、その配置や墓石の調査が行われている。墓石は32ブロックに分かれており、その配置は、階級別となっている。

玉東町にある宇蘇浦官軍墓地は陸軍と警視局の墓地である。陸軍355基、警視局64基が存在している。21ブロックに分かれており、陸軍は入り口から最も遠い位置に上官が配置されており、階級別である。警視局は、入口に近い者の階級が高いという違いはあるが、階級別に配置されている。同墓地での配置の違いは、陸軍と警視局は別々に発注がなされたためとされている。

6 岩川官軍墓地の墓石の配置について

現在の岩川官軍墓地の墓石の配置は、階級順となっている。しかし、昭和8（1933）年の略配置図（資料9）を見ると、士官（大尉・少尉）を除けば、おおよそ部隊別に配置されていることが分かる。鹿児島県立埋蔵文化財センター2021では、昭和8（1933）年の略配置図が造営当時の配置の可能性が高いことを指摘した。このような墓石の配置が変化したのは、地元の人々が墓地の荒廃のために少しずつ整備を加えた結果といえよう（第1表）。墓石の配置は、熊本県の官軍墓地の類例を参考に、造営当時から改変したものと推定される。

なお、熊本県の官軍墓地の調査報告書では、階級別の墓石の配置なのに対して、岩川官軍墓地は部隊別の可能性が高い理由は明確でない。墓石等は天草の下浦石で陸軍の墓石に主に用いられるものである。以下に、墓石配置の違いの理由について、推察したい。

岩川官軍墓地の発注の経緯などを記した資料は現在のところ不明である。墓石が陸軍墓地で使用されている下浦石（天草産）であることから、岩川官軍墓地も熊本県

などと同時に発注された可能性が高い。しかし、墓石の法量を熊本県の高月官軍墓地と宇蘇浦官軍墓地の陸軍墓石と比較すると、形状は同一であるが（第1図）、岩川官軍墓地の方が若干大きく、違うことが分かる（第2表）。また、墓碑に刻まれた文字の書体も微妙に違うようである（第1図）。このことから、陸軍からの受注者は同一で、石材は下浦石を使用し、石材の加工を下請けとして、地元で行った可能性あるのではないかと考える。

墓石の配置の違いは、墓坑の構築の違いから見いだせるかもしれない。熊本県の例では、個別墓坑や溝状墓坑に木棺が個別に配置されている。多少の違いはあるが、将校や兵士が個々に木棺や甕棺に納められている。それに対して、岩川官軍墓地は大隅半島各地で戦死した官軍兵士を集めており、墓地の北側で仮埋葬を行い、それから現在の岩川官軍墓地へ遷されている。火葬や土葬の両方の記録が残る（大隅町編纂委員会（編）1990）。トレンチ調査の結果では、個々の墓石に墓坑がないことが判明している。また、官軍墓地中央部に2つの墓坑の可能性のある掘り込みを確認しており、合葬された可能性を推定した。

これらから、岩川官軍墓地では、広範囲に渡る戦死者を葬ったために、遺体がない場合や遺体があっても合葬したため、個別の墓坑を考慮する必要がなく、故人が寂しくないように、階級別よりは部隊別に埋葬した結果ではないかと考えられる。

7 あとがき

現時点では、岩川官軍墓地の記載のある資料としては、今回紹介した手紙（資料1～9）が最も古いようである。昭和8（1933）年の手紙にある造営当時に近い配置や埋葬された方の記録を残すことにより、今後の資料として活用・残ることを期待して、紀要に紹介した。手紙を提供していただいた地域の方に感謝し、調査や要約に協力いただいた曾於市教育委員会の加塩氏・橋口氏、県立埋蔵文化財センター浅田氏に感謝したい。

註

- 1 静岡県小笠群小笠は、現在の菊川市にあたる。なお、資料7には番地まで記載があるが、調査した結果、大橋良蔵氏・大橋敦氏の子孫の方が在住している可能性があるため、ここでは記載を控える。
- 2 手紙の要約には、埋蔵文化財センター浅田剛士文化財主事の協力・助言を得た。

【引用・参考文献】

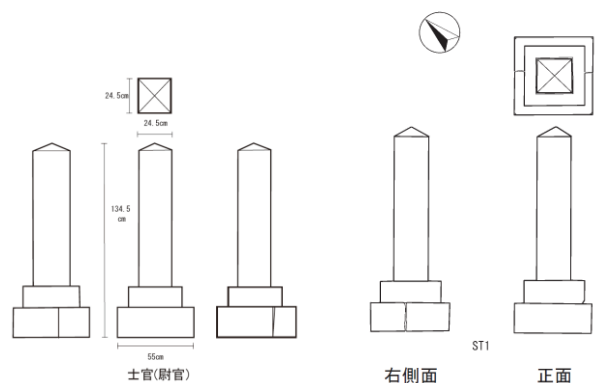
大隅町編纂委員会（編）1990『大隅町誌』（改訂版）
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021 『滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チシャケ迫堡跡群・岩川官軍墓地』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(210)

第1表 岩川官軍墓地整備経過

西暦	元号	岩川官軍墓地整備内容
1877	明治 10	現在の岩川官軍墓地向かいの空き地に仮埋葬『大隅町誌』（改訂版）
1878～1879	明治 11～12	陸軍により、建設及び落成される。（推定）
	明治～昭和	神官をしていた川崎篤義氏が経費をもらって墓地の管理を行う。『大隅町誌』（改訂版）
1933	昭和 8	岩川尋常小学校丸山義武訓導から、静岡県の大橋敦への手紙（第67図配置図あり）
	～	
1945～1955	昭和 20～30年頃	現在の階級別の配置に近い整備が行われる。（推定）
	～	周辺墓地の整備に伴って、岩川官軍墓地も整備される。
1967	昭和 42	大隅町商工会青年部によって、現在の形に近い整備が行われる。
	～	地域住民により、手厚く祀られる。
2013	平成 25	馬場集落の墓地の管理者により、縁石や墓石の修復が行われる。

第2表 官軍墓地階級別墓石法量

高月官軍墓地と宇蘇浦官軍墓地 陸軍墓石法量			
階級/単位 (cm)	高さ (墓石+台座)	墓石幅	台座幅
士官 (尉官)	134.5	24.5	55
下士官 (軍曹・伍長)	91.8	18.4	33
兵卒	77	15.5	30.5
軍夫	41.2	9.5	4.5
岩川官軍墓地 墓石法量			
階級/単位 (cm)	高さ (墓石+台座)	墓石幅	台座幅
大尉	143.5	24	55
少尉・少尉補	139.5	24	55
下士官 (軍曹・伍長)	98.5	18.5	36.5
兵卒	86.5	15	30.5
軍夫	60	9.2	1



第1図 左：高月・宇蘇浦官軍墓地墓石（尉官）
 （玉東町教育委員会2012から転写・縮尺任意）
 右：岩川官軍墓地大尉墓石（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021から転写・縮尺任意）



宇蘇浦官軍墓地墓石文字（縮尺任意）
（玉東町教育委員会2012から転写）



岩川官軍墓地墓石文字（縮尺任意）
（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021から転写）

- 玉東町教育委員会 2012『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町文化財調査報告書 第8集
末吉町郷土史編纂委員会（編） 1987『末吉郷土史』（第3版）
曾於市教育委員会 2017 「曾於市内の西南戦争関連の文化財・史跡について」『岩川官軍墓地・薩軍の墓慰霊祭資料』
曾於市教育委員会 『曾於市の幕末・明治維新・西南戦争関連史跡ガイドマップ』
玉名市教育委員会 2018『高瀬官軍墓地』玉名市文化財調査報告 第39集
八代市教育委員会 2002『若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』八代市文化財調査報告書 第16集

※次ページからの昭和8（1933）年の手紙（資料1～9）は、コピーを繰り返したもので、はっきりしない部分がある。

第2図 宇蘇浦官軍墓地（上）・
岩川官軍墓地墓石（下）拓本

① 時は嚴寒、世は多難、滿蒙の風雲急、國內不況の年、二世の英雄大西御南洲翁逝、五十有餘年、日東帝國の發展蒙の第一日、鮮滿蒙の大地へ。發辰と喝破したれど、其の政策策容れられずして懸危し、而も更に此政策決行の度量が及封虎と作乱の罪に咎はれ、明治十年、賊名を看せし勝は官軍、敗れは是賊と叫んで城山に永く恨を抱いて密と消えたり。とれど南洲翁の罪は更に咎を望まざらんべし。時代を運觀し、國家百年の大計を構つる、是公翁の精神なり。僅なる私怨もあらず、さればにや

② 明治聖帝は公翁の往時、忠勤を嘉せられ、公翁の精神を憐み給ひ、賊名を除去せ、敘位賜爵、聖恩と告れ給へり。以來幾十年、公翁の精神は薩隅の地、子ぶらば全國に耀々と成長を續け、更に將來へ進辰を續けつるあり。滿蒙の天地

友は成す、國家多難なるの秋、南洲翁として今日ありしめばの聲蒼に滿つ。公翁の偉大なる徳を偲びむ。大和民族發辰地カケテ鴨江と興安との間、詩にかりて吟せられたり。

③ 往時賊名を看て白眼視せられたる御虎翁の部下は令や公翁と行、勳を保たせしを、寧ろ名譽と觀じ得意、而も戰没者は武名赫々と、淨光明寺に將又各地に、行むしやれど、老り輝き、香花純ぶるなど、生存者は後輩、勇身敬の的となり、帝に往時を語り、意氣頓に盛なり。

④ されど之を討伐せし官軍方諸將卒は如何に。往時一薩翁の部下は、弟は薩軍、父は賊軍、子は官兵なる情景は各所に見らるゝ、こゝろなりき、は職務上大義上問題なり。

① 然るに彼地には何れが我が軍か、主客転倒の有様なり。官と名を賦となし、之皆其の志、其の職に忠なるの所以にして、將卒の精神に於ては、何れと合はれざるべし。錦旗を戴き、命と士氣を、聲に比し、身命を堵して、作乱の賊を討滅と期して、薩軍健児と決戦せし官軍、は、大日和魂の發現に外ならずして、我軍後軍の電鎧にやとを俟たず。天子の軍、錦旗を戴き、官軍、正義正勇なる官軍、各地に転戦せし、折らずに、漢國を鬼と化し、草を、下死となりしもの幾許ぞ、混戦の折、それ等も遺骨にして、故郷に帰らざる幾許ぞ。見えざる魂、雲うみは、幾梅山越えてきよよひかへれど、異郷に曝す面力、虎又幾許ぞ。柳風沐雨、手有餘年、大部介は温き父の、母のけり、又子孫の、香花に、梅香して、淋しく、時を、閱するのみ。

② 噫々、國家に人命を、捧げし面力、雲、厚き國家の、慰靈に、黙せしとは、まへ、子へ、孫への、恩愛の情、切にして、帝に、魂魄の、叫ぶか、る、あり、あり、あり、あり、一、枝の、血の、通へる、もの、供へる、此、花、是、等、男子の、心を、慰む、多きこと、信ず。野、辺の、草、亦、霜、か、けて、吹く、風、に、身、に、し、を、曉、秋、の、夕、これら、勇、士の、墓、石、に、た、た、ず、ま、は、ま、し、方、行、く、木、転、る、往、時、の、但、は、水、涙、なき、を得、ず。

③ 余祖父あり。七十有七歳なり。二十歳頃、薩軍方へ從軍し、肥日、薩、隅、各、地、に、戦、戦、し、生、死、の、境、に、直、面、す、事、一、再、り、千、と、難、事、が、不、幸、か、ま、き、永、く、今、今、に、健、在、在、り。談、往、時、に、及、ば、祖、父、慙、然、と、し、て、往、時、の、官、薩、兩、軍、戦、没、者、如、何、成、り、ら、る、や。我、等、の、埋、葬、せ、し、遺、骸、も、各、地、に、數、多、き、に、其、の、他、は、ま、し、と、數、多、か、ら、ん、と、され、等、の、香、花、や、如何、に、と、余、に、も、ら、す、事、常、

① なり。而して、汝職と、敵戦に奉じ、縣下何地に在りや、しからず、殊に、教場にて、大義を説き、人倫を教ふる身なれば、是吾、吾カ士の上にも、思ひおぼせて、然るべしと、與、願ひ、且、教へけり。是吾、吾カ士の供養、より、量なさん、奉は、祖父、堂中、奉ひたり。

② 去る、霜月、の、中、の、九日、我、吾、の、
日、東、帝、國、聖、天子、鹿、兒、島、の、地、に、玉、歩、を、印、さ、せ、給、ふ、畏、事、種、々、有、難、多、事、なり。其、人、即、余、を、鹿、兒、島、中、に、入、れ、り、序、り、常、り、如、く、淨、光、明、寺、に、詣、り、薩、軍、勇、士、が、偉、人、大、西、卿、と、還、り、て、賤、れる、墓、前、に、彷徨、し、感、慨、深、き、由、あり。更、に、行、幸、も、盛、儀、に、列、せ、し、序、に、と、參、詣、せ、し、他、縣、人、の、感、慨、深、け、に、あ、げ、し、み、を、見、て、更、に、或、く、感、に、打、た、れ、たり。之、を、思、ひ、更、に、上、當、時、官、軍、戰、没、者、の、事、に、及、ぶ、と、又、或、る、感、あり。

③ 余、亦、年、四、月、職、を、當、地、に、奉、じ、幾、許、り、な、く、して、官、軍、墓、地、
ある、を、知、り、以、來、幾、度、か、詣、り、て、勇、士、の、靈、に、謝、り、之、を、吾、墓、碑、の、首、を、拂、り、て、勇、士、の、名、を、探、り、生、死、を、察、め、たり。其、の、數、一、百、に、達、ん、と、す。

④ 去、る、年、當、墓、地、に、賤、水、一、將、校、の、未、亡、人、百、方、年、を、盡、し、て、昔、の、未、漸、々、故、夫、の、墓、前、を、探、り、得、て、遠、踏、と、故、人、の、霊、前、に、詣、り、慶、慕、の、情、稍、久、し、う、して、去、れ、り、と、聞、く。袂、を、分、ち、し、ば、花、の、かん、ば、せ、な、り、し、に、右、に、親、に、寄、れる、四、海、波、さ、れ、と、幾、十、年、間、孤、閨、を、守、り、遺、孤、を、育、ち、帰、り、ぬ、夫、を、待、ち、今、日、し、も、墓、所、と、を、く、り、得、て、額、の、叶、へ、り、と、語、り、て、墓、前、へ、り、と、聞、く。未、之、大、の、感、慨、や、如、何、に、い、ふ、る、に、涙、頬、に、傳、は、る、と、覺、ふ。

⑤ 將、校、の、家、に、し、て、然、り、次、や、數、多、き、兵、卒、毎、夫、に、於、て、や、更、に、遠、き、故、郷、を、有、する、人、を、如、何、に、之、等、の、遺、族、の、内、に、は、

① 今、だ、に、己、が、父、祖、叔、伯、父、の、此、の、地、に、眠、れ、る、を、知、ら、ず、人、々、ある、や、か、は、ら、れ、お、る、べ、し。勿、論、國、家は、と、是、等、を、調、査、し、既、に、遺、族、は、通、知、し、あり、と、は、信、じ、遺、族、の、方、は、一、才、一、脚、承、知、の、事、と、察、知、れ、ど、多、く、の、中、に、は、前、託、一、大、官、の、如、き、家、も、少、く、な、き、事、の、想、像、し、得、ら、れ、べ、し。余、是、等、の、方、々、の、ため、に、所、在、を、傳、へ、し、の、念、願、を、立、せ、ら、れ、り、と、され、ど、身、繫、危、の、職、に、任、
更、に、傳、給、負、資、資、通、儀、の、資、に、充、つ、べ、き、餘、裕、な、く、在、再、今、日、に、及、べ、り。然、る、所、本、校、校、長、山口、卓、志、氏、陰、に、陽、に、我、を、激、励、さ、れ、至、た、所、教育、會、は、物、的、に、援、助、を、提、保、せ、ら、れ、ん、と、す。余、亦、力、躍、此、事、を、決、行、せ、ん、と、す。幸、に、有、難、き、行、幸、に、遭、ひ、天、親、を、拜、し、奉、り、し、記念、と、し、時、は、冬、休、け、り、三、四、日、を、割、き、一、切、の、準備、を、整、へ、たり。老、婆、心、と、い、ふ、氣、は、甘、受、する、覺、悟、あり、只、用、ある、人、に、用、足、れ、ば、奉、是、け、り。一、個、葉、
口、の、若、輩、の、仕、業、御、許、さ、る、休、を、懇、願、し、奉、る、
是、奉、に、暇、を、百、視、し、立、は、皆、皆、皆、軍、事、なり。余、に、は、敵、なる、の、大、義、を、敢、行、し、進、ん、で、國、難、に、殉、じ、た、る、壯、士、な、り、い、ふ、事、が、憤、ある、が、た、す。聖、天、子、の、一、糸、子、を、赤、子、と、み、同、胞、なり。若、し、余、の、祖、父、に、し、て、當、時、何、地、か、に、死、し、所、在、不、明、な、り、と、は、如何、に、異、郷、に、詣、ら、る、人、も、な、く、して、淋、しく、眠、る、勇、士、を、思、ふ、と、き、他、人、事、を、思、は、れ、ぬ、は、り、幸、に、余、の、意、ある、所、序、汲、み、取、り、あり、て、許、さ、る、事、切、切、な、り。終、り、に、百、の、勇、士、に、代、り、遺、族、の、方、々、の、温、き、血、の、通、信、を、希、望、し、行、き、て、暇、を、御、未、訪、を、待、奉、る、中、を、取、り、も、つ、の、切、切、余、折、る、と、は、お、ぼ、す、べ、し。 拙、文、呈、奉、ま、さ、ま、謝、

土、月、三、日、終、 鹿、兒、島、縣、贈、岩、川、小、學、校、訓、導、 丸、山、義、武、
後、援、 全、 校、長、 山口、卓、志、
岩、川、町、教、育、會、

昭和八年四月

岩川町馬場西南役官軍遺棄地埋死者名簿				
番	原籍	戦死年	所属隊	氏名
1	集瀬肥後国飽田郡京町主	暁・七八	廣瀨鎮守聯天守隊長	斎藤益山縣照方
2	新瀨縣新田郡大野村	全	一〇番大隊附	馬曹 松本東五郎
3	石川県加賀郡石川郡	全	近衛砲一大隊	兵長 野坂晴次
4	全	全	全	全 堀井一之
5	和歌縣紀伊海部郡歌新	全	全	兵卒 田村良直
6	堺市大田区邊部杉本	全	全	全 貴田竹造
7	石川県加賀郡石川郡	全	全	全 緒方與市
8	島根縣出雲郡	全	全	全 絹谷勘藏
9	兵庫縣淡路郡	全	全	全 興津嘉市
10	和歌縣紀伊郡	全	全	全 為井矢之助
11	兵庫縣淡路郡	全	全	全 上田定之助
12	三重県伊勢郡	全	全	全 伊藤長之助
13	四国縣備前郡	全	全	兵卒 島田正知
14	岩山長門郡	全	廣瀨鎮守聯天守隊長	兵卒 伊藤伊助
15	岩山長門郡	全	全	全 加屋葛藏
16	三重県伊勢郡	全	大坂歩上聯天守隊長	全 飯田林吉
17	兵庫縣淡路郡	全	全	全 塩岩百藏
18	和歌縣紀伊郡	全	全	全 塚本平吉
19	岩山長門郡	全	兵卒 聯天守隊長	全 倉橋房次郎
20	(3) 同(一)	全	近衛砲一大隊	兵卒 南保安三郎
21	兵庫縣播磨郡	全	全	兵卒 佐藤喜太郎
22	全 播磨武庫郡	全	全	全 坂口虎松
23	和歌縣紀伊郡	全	全	兵卒 千品留次郎
24	兵庫縣淡路郡	全	全	全 梅田中造
25	和歌縣河内郡	全	全	全 内堀長平

大橋高次郎氏 轉送 様

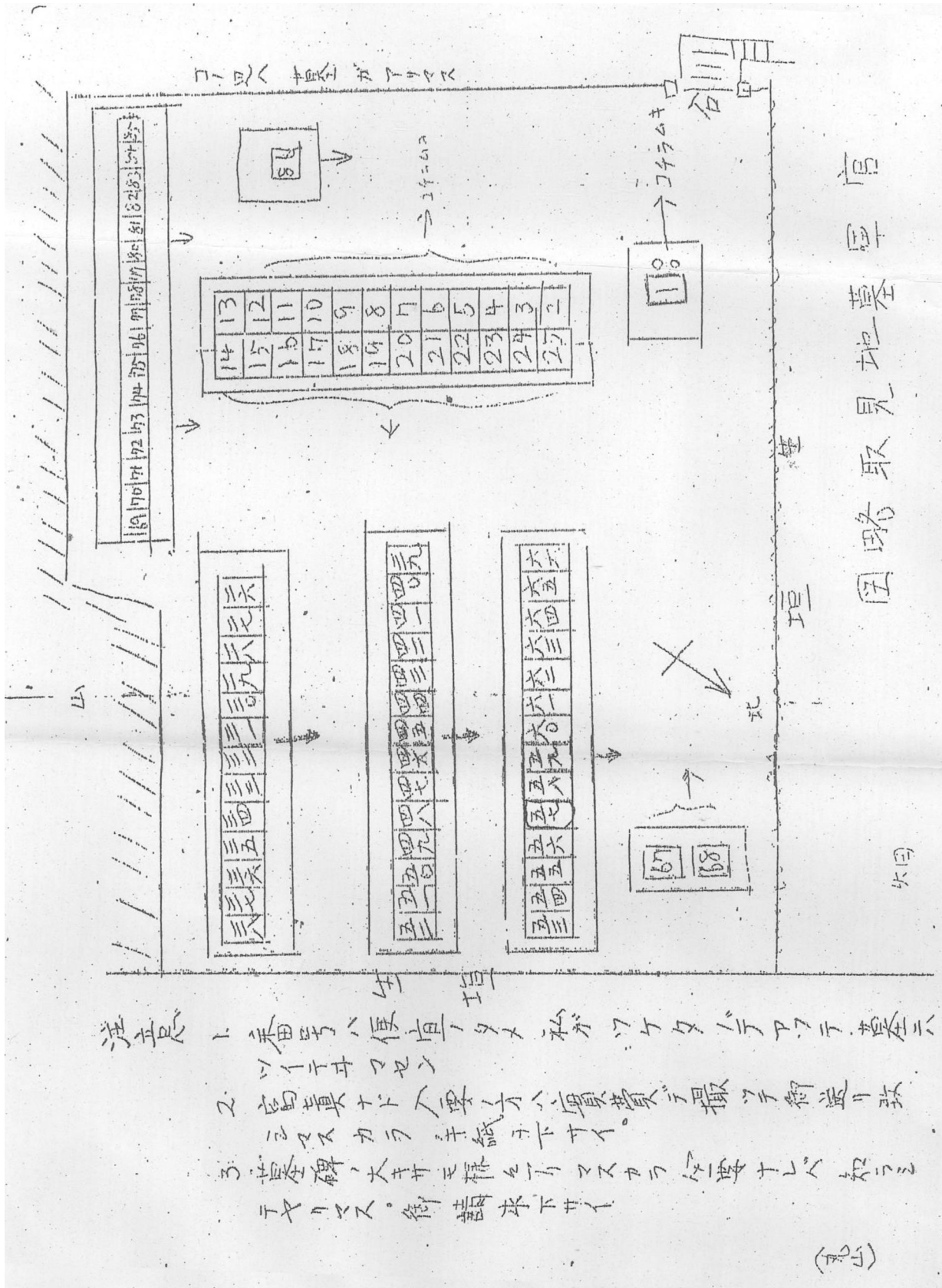
26	石川縣加賀石川郡金澤長町	明十七、八百	名屋長七職二天守	會田留次郎
27	和歌山紀伊日田郡能登村(全)	百七十八	近衛砲二天一小隊	聚、王置玄成
28	栃木下野佐野郡寒川村(全)	百外村	全右	兵卒青不三平五
29	埼玉武藏埼玉郡秋島村(全)	備有側參	奉、三解二天一小隊	會田留次郎
30	濱野赤野郡堤村(全)	百七十八	近衛砲二天一小隊	聚、中野清四郎
31	石川越中礪波郡柴田屋村	百六十八	名屋長七職二天守	兵卒宮田勝藏
32	高知阿波名東郡佐古橋(全)	百八	近衛砲二天一小	木村芳藏
33	和歌山紀伊名東郡和歌山	百引	全	田村正則
34	堺泉北吉野郡西谷村	百引	全	鍋谷啓吉
35	石川加賀石川郡長壽寺野	百七十八	名、步七職二天守	區田杉坂直喜
36	愛媛伊豫屋敷郡中西村(全)	百七十八	名、步七職二天守	兵卒砂本鉄治
37	高知阿波宇治郡野原村(全)	百七十八	名、步七職二天守	佐野與吉
38	愛媛伊豫越前郡魚津村(全)	百七十八	全	高田赤次
39	宮城陸中宮城郡仙台北八幡町	百七十八	借、步四職二天中	今野清八
40	青森鹽竈三戸郡田子村(全)	百七十八	全	山市太里
41	石川加賀石川郡金澤田町(全)	百七十八	名、步七職二天守	多胡仁三郎
42	石川越中礪波郡新川(全)	百七十八	名、步七職二天守	長根塚亀次郎
43	高知阿波名東郡助任町(全)	百七十八	名、步七職二天守	兵卒河野庄吉
44	長門安藝能登郡給下村(全)	百七十八	全	藤原政市
45	宮内所大島郡秋村(全)	百七十八	全	板野庄吉
46	廣島縣宇治郡宇田郡松江町	百七十八	全	花田仁助
47	山長門厚狭郡山川村(全)	百七十八	全	西村守吉
48	宮内所佐波郡高瀬村(全)	百七十八	全	平野登代吉
49	千葉安房朝比奈郡奈郷村(全)	百七十八	名、步七職二天守	鈴木徳次郎
50	宮内所窪屋郡子位庄(全)	百七十八	名、步七職二天守	石井友人
51	石川越中礪波郡三屋村(全)	百七十八	名、步七職二天守	坂下忠藏
52	石川加賀河北郡大津交野(全)	百七十八	全	長長田英三郎

静岡県小笠原郡小笠原町大石

大橋 敦 様

⑧

53	駿河常磐若波城郡常磐村	諸縣郡大崎村	東京歩三聯大一中	軍曹 山川正猛
54	石川常磐石川郡村木町三百	百引村	大橋工兵大一中隊	" 倉 満治
55	駿河常磐若波城郡常磐村	大崎坂柳村	廣島歩十聯大一中	兵卒 田村彌三郎
56	東城縣赤松全小山村	諸縣郡大崎村	東京歩三聯大一中	兵卒 古葉長藏
57	常磐常磐郡大石村	諸縣郡大崎村	名古屋歩三聯大一中	" 大橋 良藏
58	常磐常磐郡大石村	全右	" 歩三聯大一中	後藤 虎吉
59	常磐常磐郡大石村	全右	" 大聯大 三	" 小野 木忠作
60	秋田縣常磐全(小石)	郡城病院	信步四聯大一中隊	" 阿部 三助
61	福島縣常磐郡大石村	郡城病院	" 中隊	" 鈴木 三之助
62	全 常磐郡大石村	郡城病院	全右	" 大橋 勘治
63	秋田縣常磐全(小石)	全右	全	" 大友善次郎
64	福島縣常磐郡大石村	全右	信步四聯大一中	" 渡邊 四吉
65	宮城第五大北牧目村	全右	信步四聯大一中	" 伊藤 栄五郎
66	出羽前田川郡廣野新田	全右	信步全右一中	" 五十嵐 慶治
67	愛知尾張春井村本町	郡城病院	名古屋歩三聯大一中	少尉 林 為隆
68	高知佐賀郡高見全	郡城病院	廣島歩三聯大一中	少尉 奥田政實
69	熊本縣熊本縣大石	百引村	別働隊第一旅團	軍曹 坂本彦七
70	全 熊本縣大石	"	"	" 宮本新平
71	熊本縣大石	"	"	" 月足新治
72	全 熊本縣大石	"	"	" 山本文次郎
73	" 熊本縣大石	"	"	" 佐々木初次
74	" 熊本縣大石	"	"	" 古閑 菊壽
75	" 熊本縣大石	"	"	" 工藤 三平
76	福岡筑前宗像郡津屋崎	"	"	" 扇 五吉
77	熊本縣熊本縣大石	"	"	" 本田 信七
78	全右	"	"	" 下田 平次
79	" 熊本縣大石	"	"	" 西村 藤七



鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第15号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
